

山の気象シンポジウム アブストラクト

日時：6月10日 13時より

会場：気象庁第1会議室

1. 大井正一（気象研究所）：ヨーロッパの山の気象 （20分）

ワークスビッツェ、ゼンティス、ゾンブリック、フィヒテルベルグの気象資料をもとにして富士山と比較することにより、気候的に又日々の変化に富士山とどのような差があるか調べて見た。風速については日本の山の風の強さからいえば殆んど常に無風といってもよい位の大差がある。然し気温、湿度についてはそれ程の差が無い。特に不思議なのはヨーロッパの山は大陸的で乾燥しているといわれているが、湿度はその逆になっていること、これは富士山頂は特に高度が高く湿度が低いという事から考えねばならないと思う。

2. 宮内駿一（気象庁）：降雪のいろいろ

冬山では天気が悪いと雪が降ると思われているが、降雪の原因を大別すると二つある。一つは季節風が吹き出した時に降る雪であり、もう一つは低気圧が接近した時に降る雪である。季節風の雪はシベリアから吹きつける北西の冷たい空気が原因で降り、低気圧性の雪は主として南岸低気圧が近づく時の暖い東寄りの風が原因で降る雪であり両者の雪は降り方がちがう。一般に南岸低気圧の雪は湿り、季節風の雪は乾いているが、山の高低でもちがう。

3. 荒川正一（気象大）：北海道にみられる二三の局地的強風（日高しも風、羅臼ダシ風、寿都ダシ風）

北海道において体験した三つの局地的強風について、それらの個々の特性と共通した特徴について述べる。日高しも風と羅臼ダシ風は各々日高山脈と知床山系の山蔭に生ずるおろし風で前者は東よりの風、後者は北西風である。いずれの場合にも上空に不連続面の存在することが共通しており、前者は温暖前線の前面で、後者は寒冷前線の後面で起っている。寿都ダシ風は峡谷から吹き出すいわゆるダシ風で、このばあいにも上空に逆転層が存在している。

4. 海老沼敏雄（溪峰山岳会）冬山の気象—登山者に

よる観測と分類—

私達の会で過去8年間冬山合宿に入った時の観測とその結果にもとづいて天気図を型別に分類し、考察したものである。

観測記録は北アルプス、南アルプスそれぞれ4点、計8個所である。北アについては東側の山にししか入山していないので、全般的な冬山の気象とはいえないが、冬の北アの気象についていくらかはこれでわかると思われた。

5. 山本三郎（船津測候所）：富士山の気象（第8報） 富士山の初冬の気象について。（20分）

過去における富士山の遭難例を見ると、晩秋から初冬（10・11月）にかけての事故件数が圧倒的に多い。これは、冬富士の登山者がこの季節に集中する為なのだが、その年、その年の季節の遅れ進みも、遭難事故原因に大きく影響していると思われる。そこで、今回は季節の遅速が、登山条件にどのように影響しているかを述べたいと思う。

6. 地形雲研究グループ：地形性雲について（20分） （気象研究所）

我々は気流の地形による影響を雲の発生、移動状況を通して測定するために昨年秋以来富士山麓において地形雲の観測を行っている。その結果、富士山付近に発生する雲は大別して次のように分類することが出来た。

- (1) 笠雲
- (2) つるし雲
- (3) 山麓の地表面に接して発生する雲

（この雲は本邦全般にわたって快晴時に発生しやすく、しばしば、箱根、丹沢山塊付近だけに降雨をもたらすもので特に注意される）

- (4) はた雲（冬季、季節風が強い時にみられる）
- (5) 山腹中層に沿う雲

今回は小型カメラによる二点観測法、笠雲内部の運動、そして(3)の雲の発生およびその流れる状況、分布を16ミリ映画、スライドによって示す。